

総合人間学部 4年

伏見 恵介

ガーナ

2018年10月11日-

2018年11月13日



渡航概要と内容

ガーナにおける民間孤児院の経営状況の実態を明らかにし、行政に対して支援の要請をすることが今回の渡航の目的でした。方法としてはガーナ滞在中に都合が合った、首都アクラを中心とした13の民間孤児院を訪問し、各孤児院の代表者に簡単なヒアリング調査をするというものです。(当初は各施設の児童や職員にもアンケート調査などをする予定で質問票も作成していましたが、しかし各施設によって子供の年齢や特性が違うこと、職員の役割の違いなどを正確に認識していなかったことが原因で共通の質問票に研究としての意義が認められないことに気づき、今回は適宜児童や職員の話聞くことに留めました。)ヒアリングでは設立年などの基礎情報をはじめ児童の特徴、資金の調達方法などを幅広く聞き、何よりもガーナの孤児院とそれを取り巻く環境について理解できるように注意しました。また更なる理解のために公営孤児院である Osu Children's Home への訪問、国内の児童養護政策を取り扱うガーナの社会福祉省(Department of Social Welfare)や児童の保護などを担当するガーナ警察の人身売買対策課(Anti Human Trafficking Unit)への訪問と職員への質問も行いました。

結論に関していうと、現状民間の孤児院が政府に依存することは不可能だということがわかりました。理由の一つには民間孤児院の多くが児童に最適なケアを提供できていないこと、そして最適なケアには金がかかり、財政に苦しむ政府ではそれが賄えないことがあります。政府の財政不足を表す一つの事例として、Department of Procurement, Supply and Management Chain(DPSMC)という部署の存在があります。DPSMCは行政組織を横断する部署で、各公営施設の物資の在庫状況を管理し、各施設への物資の供給を最小化することを目的としています。例えば公営孤児院には政府から定期的な補助金が送られてきますが、外部から寄付があった場合にはDPSMCはその分の補助金を減額したり、施設では使い切れない余剰物資を他の公営施設へ回したりしています。このように寄付までを利用しながら財政負担を極限まで減らす方法に政府は

取り組んでいます。このような状況で、基準を下回り財政的にも不透明な孤児院に補助金を与えることは難しいと感じました。

一方で民間孤児院の経営に関しては別の可能性を得ることもできました。私が訪問した Christ Faith Fellowship Foster Home という孤児院では、41 人の児童を養育しながらも、民間からの寄付を上手く活用しています。この孤児院では寄付が余分に発生してしまうため、慈善団体からの寄付を断ったり、寄付を他の孤児院や施設に再寄付しているという話を聞きました。寄付を断るほど安定的な経営を行っているのは話を聞いた限りこの孤児院だけですが、時期によっては他の孤児院でも寄付がダブついて余ってしまうことがあるようです。特にクリスマスシーズンは寄付が各地から殺到して施設内では処理できないという話を複数の孤児院から聞いています。政府からの援助が期待できない以上、施設や時期によって偏りの大きい寄付をどうコントロールするかが、途上国の孤児院経営において重要な点であると感じました。

* 「児童養護施設」というのがより正確な呼称ですが、ここでは便宜上「孤児院」と呼んでいます。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航中に各関係者の話を聞きながら興味深く感じたのは、「寄付」に対する政府の認識です。

「寄付」というのは人々の善意であり、寄付をするのもやめるのもその人の性格や景気などの偶然で決まる、というのがそれまでの私の認識でした。しかし今回の調査で、政府はどうも民間の寄付というものを石油や金鉱のように利用可能な資源として捉えているのではないかと感じました。普通であれば政府が本来責任を持つべき福祉施設を、民間が寄付によって運営するというのはおかしい話です。人々の善意の上で成り立つ施設というのは、それだけで脆く感じてしまうからです。

しかしよりマクロな「国」という単位で寄付というものを見てみると、確かに資源だと捉えられなくもないことに気がつきました。この世界で、人々から完全に善意がなくなってしまったことはあるのでしょうか？寄付というのは個人の善意が偶発的に物質化したものですが、その偶発的な発生はガーナの 2800 万人（世界の 72 億人）という巨大な集団の中で絶えず連続的に起きています。その時に寄付というものを（石油や金鉱よりも素晴らしいことに）尽きることがなく安定的な資源だとみなすことができるのです。

資源としての寄付は残念なことに地域的な偏りがあり、しかもコントロールされることを嫌います。この性質が寄付を非常に扱いづらくしている原因ではないかと考えています。私のこれからの課題としては、寄付が本当に必要とされているところへ向かうように誘導するにはどうすればいいか、寄付を再分配するにはどうすべきかという点にあります。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

私がこの研究を始めたのは、ガーナで孤児院の支援を行う share step という団体に所属していたことがきっかけです。まずは彼らに対して今回の活動の詳細な報告を行い、団体としての活動に生かしてもらおうと考えています。特に児童養護システム全体の中での孤児院の機能や役割に

については私もこれまで知らなかったことなので、ガーナの孤児院に対する理解を深める上で重要な情報になると考えます。

またもし公式な研究を次に行う際には、ここで得られた知識をベースにすることができると思います。調査中、関わった人たちに訂正してもらいながら、Vulnerable Children などの用語の定義や行政の機能について理解が深まりました。次回は厳密な定義に基づいて、資料価値のある統計を取ることができると思います。

今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

このプログラムを利用することのメリットは2つあります。一つは30万円で、これがあれば世界のどこへでもいけるし、やりたいことも程度によっては自由にできます。二つ目は京都大学からのお墨付きで、個人的にはこれが一番おいしいところだと思います。個人で行ってはただ突き返されるだけの役所でも、大学からの証明書を出せばすんなり通してくれ、話を聞いてくれました（途上国だからかもしれませんが）。そして事情を説明して役所から二枚目の証明書を貰うと、あら不思議なことにガーナの全ての孤児院で話を聞いてもらえます。こんな機会は30万円出しても買うことはできません。プログラムを利用するからには、普段自分の力だけではできないことをやるべきだと強くお勧めします。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *宿泊費
- *食費
- *現地交通費、調査費、調査協力のお礼の品
- *海外旅行保険 など

